

人は水は
牛は音が
はたがや
もたがや
なくやす
くやす
育す
つ

さらば芸能界周遊日記⑥ 鎌田慧 2

「スター」日記⑨ 坂本龍一 4

終わりの雑感⑥ 志沢小夜子 6

料理がすべて⑨ 田川律 8

たのしみがない⑧ 高橋悠治 10

行ったり来たり⑨最終便 西山正啓 12

名僧・日記⑤ 高橋卓志 14

子供たち⑨ 柳生まち子 16

獄中から 桜庭幸司 18

わるいくせ⑨ 八巻美恵 26

下手の横吹き笛日記⑨ 西沢幸彦 28

ぼくがつくった本⑧ 平野甲賀 30

一点一ページカット 柳生弦一郎

さらば芸能界 周遊日誌

10月18日の夜、赤坂で大原麗子取材。空手着をつけてのホンダのCM撮りだったとか。負けず嫌いで、子どもっぽい自己中心型のがんばり屋さん、それでなおかつ世話焼型。母が勤めに出たあと、学校を休んで家にこもっていたのが少女時代。外むきと内むきのふたつの性格が対立しながら共存していて、本人自身も精神的に疲れそうである。ひと言多いのが気になるが、「仕事人間」のところには共感した。

10月22日 渋谷。税関の検閲を最高裁で争っている人物に会う。ボルノ裁判である。そもそも、大蔵省の石頭が、ワイセツか芸術かを判定して輸入を制限する。判断の基準はケがあるかどうか

か、その点検が仕事である。役人が調べる。そのあとパートのおばさんが倉庫の片隅で塗りつぶす。非生産的な仕事である。

10月24日 大阪。難波花月で、「ハイヒール・モモコ」の漫才をみる。そのあと、近くの喫茶店で取材。ハイヒールは「中流」のお嬢さん、モモコは元不良少女、という組合せ。舞台でのカケアイよりも、喫茶店でのおしゃべりの方が数倍おかしい。相手のおしゃべりに入れるアイの手が絶妙で、話ほとんどはずんで行く。観察力と自己批評力はかなりのもの。高校一週間で中退、保護観察付きだったモモコは、とくにおもしろい。

10月25日 越前屋橋太、タージン、トミュージズ。大阪のテレビやラジオに出ている青年たちに会う。それぞれ学生および学生出身。素人芸の不安定さが面白い。彼らが出ているのは、東京

の押しつけがましさを酷薄なレポート一番組とちがって、やさしいコミュニケーションをつくっている。

トミュージズの研は、もとプロボクサー。リングは十五回戦の重労働だが、いまは口八丁の短時間労働。名古屋のラジオ局へ新幹線に乗って出演。それで十分もあれば仕事が終わる。こんな楽な仕事はおまへん、と笑った。

嘉門達夫の仏頂顔も気に入った。苦い笑いの役者になれるのでは。シンパシーでは、銀次・政次。ふたりとも元ヤンキー（突っ張り）の暴走族。たび重なる遅刻で、謹慎処分の身だった。カレライスが非合法化されたあとの密売をテーマにした自作のナンセンス漫才は気に入った。これで芸能界の取材は終り。

10月31日 枚方（大阪府）。管理教育についてしゃべってトンボ返り。「週刊朝日」の最後のゲラ。大原麗子の

記事が出るや、森進一ファンからの抗議のハガキや手紙が殺到。うるわしい夫婦像を崩壊させた彼女への憎悪はものすごく、「ウマズメ」という古典的な差別用語も登場した。森進一の歌の世界とキャリアウーマンの世界は、不具戴天の敵対矛盾だったようである。

手紙を読んで、考えさせられることしきり。つまり、連載が終ったあと、ようやく芸能界にかけるジンミンの想いを知らされたのである。

11月6日 日比谷のホテルでパーティー。渋谷のガード下の呑み屋「ぶい」の二十周年とその記念誌の出版を祝うパーティーなので、何年ぶりかでこの種の行事に顔を出した。思いもかけず壇上からアイサツをさせられ、シドロモドロ。やっぱりパーティーは苦手だ。

11月7日 朝、浜松町に完成した東芝ビルの見学。OA機器の一大ショーウインドー。事務室も工場になった。

このカンカ的、オーウェルの状況をジャンルな映画にすれば面白いのに。

夕方、三沢空港着。滑走路でしばらく待機。機械的な間を置いて、自衛隊の戦闘機が発射するのがシルエットでみえる。米軍と民間航空が平和的に共存して珍しい空港である。

11月8日 六カ所村の「石油備蓄基地」見学。直径八〇メートルの役立たずのタンクが、五一基も整列。開拓部落をおしつぶして建設されたのである。

十四、五年前、県の役人と土地ブローカーが走りまわっていた。開発反対運動がはじまる前から、何度か通ってきた村である。これから、再処理工場、ウラン濃縮工場などが建設されようとしている。最初のころ、社会党も共産党も「巨大開発」への批判の視点がなかった。ところがあとから、鹿島からやってきた妙な男と結びつき、「過激派退治」に乗りだした。運動の高揚と

衰退をみてきただけに、この地域を歩くと複雑な気持ち。

11月9日 村長に会う。反対派の村長を追い落した男である。開発と原発を受け入れたこの村長ともおなじように、ムラのことなどは何も考えていない。県は国に従属し、村は県に従属する。それでも自治体という。

11月10日 前村長と数年ぶりに会う。小泉金吾さんは腰を傷めていた。新納部落のほとんどが移住したが、彼はまだまだ意気旺々である。白畑さんの家は、相変らず質素に暮らしていた。乳牛から肉牛に切り換えた。牛乳の生産は、苦勞のワリには、報われることが少ない。乳業資本だけが儲ける仕組みである。牛肉と大豆をもらって帰る。

11月11日 六カ所村をまわる。

11月12日 森弘太の案内で三沢漁港。漁港にしては巨大すぎる。建設費は、全額防衛施設庁負担。（鎌田慧）

「スター」日記

10月22日、JAL006便、成田発。同日11時半、N・Y着。午後ニューヨーク・ヒルトンにチェックイン。すぐソニーのスタッフとミーティング。7時、ソーホーのバイク氏宅に集合。成子夫人の料理。早速、未完成のビデオを見ながら、それを又ビデオで撮る。なかなか料理に手がいかず、成子さん怒る。部屋にあったオンボロピアノを弾いて、思わず熱くなり、30分以上もフォト・セッション。夜半すぎ、ホテルに戻る。N・Yは4年ぶりか。夜がこんなにいるさいとは知らなかった。眠れずにCATVばかり見ている。ビールで気がとおくなる。

10月23日、11時にバイク宅集合、ビ

デオ機材を持ってジョン・ケージの家を訪れる。ミスター・ケージ、笑顔で迎えてくれる。清潔で広いキッチン、壁のポップ・アート達、掃除好きのメイド、屋上の小さなみずばらしい「庭」。エムバイヤーと貿易センタービルに見える屋上でインタヴュー、小一時間。僕は持参した「音楽図鑑」をプレゼントし、ケージ氏は「Times & Variations」にサインしてくれる。簡単に昼食を摂り、午後の撮影の為にワシントン・スクエアに行く。バイク氏が書いたコメディ風のスク립ト。何度か人にぶつかり、倒れ、女の子に追いかけられる。もちろんビデオの中のお話。

明日のレコーディングの為の詩の打ち合わせ。僕のシングルを、彼が詩を書いて彼が歌う。

10月24日、やはり余り眠れなかった。2時にリビング・シアターのリーダーのジュディス・マリーナとジュリアン・ベックを訪ねる。用意したいくつかの質問に答えてもらう。愛について、核の冬について、60年代の遺産について、——等。ジュディスは非常にエネルギーッシュな女性。やはりレコードのプレゼント、彼女からは最近出版された彼女の自伝を貰う。

一時間以上の撮影を終えて、バイク氏宅に行き、又撮影。8時30分、RPMスタジオ。シングルのレコーディング。トーマスは今日、半日かかって詩を全面的に書きなおした。結局終わったのは朝の7時。もうろうとしてホテルに戻る。

10月25日、2時、ロビーでモリサと

待ち合わせ。歩いてセントラル・パークの前のカフェテリアに行く。来年の彼女のパフォーマンスの為に音楽をつくるので、そのミーティング。彼女はひどい近眼だ。5時30分、モダン・アート・ミュージアムの前で撮影隊と待ち合わせ。講演中のシャロート・モーマンに、飛びいりてインタヴュー。ガダ

ルカナル島での経験について。ホテルに戻り、部屋で撮影。バイク氏とは「おつかれさまでした。」アシスタントのポールは非常に優秀。必ず一度、一緒に仕事したいね、と言って別れる。

10月26日、1時30分発、JAL005便。

10月27日、4時10分、成田着。成田に朝日ジャーナル編集部が待ち受けている。早速仕事か。

10月28日、ユーロスペースに水牛楽団の再開を見届けに行ったら、出演させられてしまった。悠治さんと二人で

やった即興がおもしろかった。

10月29日、1時「小室等の音楽夜話」。石川セリと井上陽水に会う。3時半、赤坂T.V.T、プロモーション・ビデオ「羽の林で」の編集。8時、NHK401St. 「サント」収録。山下達郎に会う。一月前に生まれた子供の眼があいたそうだ。

10月30日、「週間プレイボーイ」取材。「ザ・ビデオ」取材。シネ・セゾンで中上健次脚本の「火祭り」観る。

10月31日、音響2St. 「シングル」レコーディング。

11月1日、午前中、家族でサンシャイン水族館にラッコを見に行く。午後、音響6St. 「シングル」ミックス。9時、ライブ・インでドクター・ジョンのコンサートを観る。

11月2日、音響2St. CM録音。

11月3日、夜、六本木のケネディ・ハウスで鮎生君の結婚式。

11月5日、朝日新聞の原稿11回分、終わる。1時、音響2St. 「シングル」ダビング。「FMファン」取材。浅田君とミーティング。

11月6日、音響2St. 「シングル」。

11月7日、音響2St. 「シングル」。

11月8日、NHK505St. 「サント」、ゲスト高橋幸宏、立花ハジメ。

11月9日、音響2St. 「シングル」。

11月10日、音響1St. デビッド・シルヴィアンのビデオのサントラのレコーディング。「FMサウンズ」収録。
(坂本龍一)

終わりの雑感

沢木耕太郎のエッセーの中に「風が見えたら」というのがある。マラソンランナーが一心不乱にかけつづけて、ある日、まわりの風景に出会ってしまふ。人はそのあとどうするのかという話である。ゴーマン美智子や円谷や瀬古の話が出てくる。が、私はこの話を読んでいて、この人が書いた『一瞬の夏』の中のプロボクサー、カシアス内藤を思っていた。

ここで一発うてばという時に、内藤はふっと我に帰る。相手を徹底的にうちつづけることが出来ない。その弱さ、もろさが彼の敗因になる。沢木はそれを弱さともろさとは表現していなかっただけに思うが、それは何故だと思

いつづけたことが、このノンフィクションを書かせたと書いていた。こういう時は、風を見ないで生きることのたやすさがかならず裏にひそんでいる。

私はそこで私の職場（日教組本部）のことなどを、はたと思ってしまう。というのは、大上段にかざせば、戦後の労働運動や組合は風を見ないまま高度成長経済をのりこえ、今日に至ってしままい、風を自然に見るともなく見てしまったといったところが今なのではないかと思えてならないからだ。がむしろに権利闘争、賃金闘争だのと必要に迫られてやってきた。勤評闘争というすこい闘いもやった。なにしろ横浜の小学生だった私の記憶の中に、教師のつけた「勤評反対」のリボンや、しばしば休んだ教師のすがたがあざやかに浮ぶのだ。この記憶は皇太子の結婚と同じくらい心に残っている。その頃日本には文部省が二つ——虎の門と

一つ橋にあるとマスコミに言わせた組合である。権力の強さではなく存在の強さ、教師の気迫と内容によってである。

今、私はボロボロだ。いろんなことを見たり聞いたりしすぎたし、組合なんてともルーズな企業みたいにしが見えない。決定的なのは、自分がこの温湯から出られなくなってしまったことだ。

風を見なかったのは組合ばかりではなく、そこで働く人もしかりである。風を見たらどうするのか。たった一人で、その風の吹いたあとを見定めろ。愚かな私は、四十近くなってそんなことに気付くのである。ハテ、我組合はもう気付いているのだろうか。

その時はサー、海の色が、にしんのうろこで牛乳色になったのよ。あいの風がじゅす（寿都）の方から吹いてく

ると、にしんが風によってやってくるのね。海の温度、その時、冷たくても暖かくてもダメ。たてあみは山の上から風だの海の温度だのはかっているんだよね。だからにしんのくる海の温度ってあるのね。みーんな、青森だのから出稼ぎにきて、浜はにぎわったわね。お金残した人もいただろうけど、おおかた湯水のように使っちゃったのよね。にしんがくると、にしんかついで、片手におにぎり、片手ににしんの焼いたのを持って、みんな働いていたわよね。昔は、どこの家にも身欠きにしんが軒先につるされていたの。にしん、さげ、こんぶって、北海道の名物のことよ、とお母さんはうれしそうにそう言っていたんですが、私もこの日は出された美味なる料理をひたすら食べ、ずっ

とだらしなく笑っておりました。

にしん場育ちのお母さんとは、二カ月前、私がケイサイツ病院に入院してい

た時、私のとなりのベッドにいたYさんのお母さんです。

この日は料理と一緒ににしん場の話が、しみじみ心に残った日でした。古い写真とともに、明治生まれのお母さんの若い頃の話、一時、その青春を味わわせていただいたのです。

お母さんは、いつ頃、どこで風を見たんだろうか。

かえるときに、ぼつぼつとあめがふっていました。これくらいならだいいじょうぶだろうとかえろうとすると、きゅうにあめがひどくなってきたのでいそいでこうたろうをむかえにいった、びしょびしょになってかえってきて、タオルを出して、頭やいろんなところをふいて、ふくのしめったのは、ストロブのところにあたっていて、こたつでもあったまっています。でもこんなくらしは、わたしたちには、あたりま

えのことになってきました。それにひきかえあふりかの人とかは、こたつもストロブも、ガスもなくてとてもふべんにくらししています。でもいっしょうけんめいにみんななどのひとつもくらししています。

小学校三年の娘の日記を見てドキんとした。この子、いろんなこと嫌な顔一つせずやってくれているのが、この子にとってあたりまえの暮らしになってしまっているからだと思うと、私の未熟さよ、子を持つことのわずらわしさの裏に、子を持って気づく風を見る場面というのがある。そういえばこの子、三才ぐらいの時、私の左手を見てお化けの手といって二人で泣いてから三、四年たって、お母さんの手かわいって言うてくれたのね。この子の中の嵐のような変化はあとになってようやく親の私に届いている。娘はいつ風を見るのだろうか。（志沢小夜子）

料理がすべて

人間いい加減なもの。今月で終りとわかると、ブツリと緊張の糸が切れ、これまで毎日克明につけていた食事もすっきり白紙。それこそ反省すべき最大のことか？

（今月の自炊）①チゲ鍋。くせ、というのはオソロシイ。昔、大学の終りの頃にとある小さな事務局にアルバイトしていた。窓のないビルの一室。いったん入ると、夜の十時すぎまで一歩も出られない。昼も夜も出前。この時、近くに安くてうまい鰻屋があった。名前は「共栄」。鰻丼が百五拾円。値段の割にうまい。毎日、昼も夜もとった。そしてつけられたあだ名が「うな公」。またある日、それからほどない年を経

た頃、今度は前より少し大きい事務所へつとめた。人が退社する刻限にホルム目がけて働きに行くテの事務所。この近くにカウンターのだけの中華料理屋があった。たしか「眠眠」のチェーン店。そこへ昼も夜も通った。「イーガ・コーテル」「リヤンガ・チャオメン」などという怪しげな中国語を覚えたのもそこ。イー、リヤンなどは、のちに中国から歌舞団が来てたしかめられたが、オアイソする時、「スアンジャン」と言ったのは、今もって何の意味かわからず仕舞である。またあの頃、それはこのふたつの勤務のさらに前、大学へ行きつつ夜間高校へ勤めていた頃かもしれない。時々行く駅前のカウンターだけの寿司屋があった。のちに出来た「十円寿司」「元禄寿司」の前身みたいな寿司屋だが、そこではトロ鉄火しか食べなかった。十回も通ううちに、坐ると黙っていてもそれが出

てきて、「オアイソ」というまで続く。というわけで、今月も引続きチゲ鍋をあちこちで作った。一度などは、ぼくは台湾料理を思い切り食べて、満腹なまま出かけて行って作ったこともある。そこでも納豆を入れるのが好評だった。②カニの味噌汁。友人が下北沢の魚店でアルバイトしていると聞いてのぞいたら「サバ買ってって」と言われたが、その日はどうすればいいかイメージがなかった。小さい冷凍のカニ五匹と鯛の頭半分を買った。カニはそのまま食べるには小さすぎたので味噌汁にした。コブを入れた水を煮立て、カニを横半分に切りほおり込んで、少し煮て、豆腐をサイの目に切って入れ、味噌で味つけてオワリ。

③鯛アラ煮。頭を適当に切る。サトウ、ミリン、ショウユをかける。ショウガを千切りにして加え、トロ火で煮る。ササガキのゴボウもあうし、ユズを細

く刻んだものもいだろう。

④ブイヤベース。寒くなったので、やらなくては、と思いつつ今冬はまたやっていない。この連載も今月でオシマイなので、これだけはフロク。ぼくのキライな「男の料理の本」から盗んだ作り方。ニンニクをたっぷり刻む。ひとに言わせると、刻んでるのでなくブツ切りだそうだが、まあ堅いことは言わない。タマネギとトマトもたっぷりミジン切り。そこで少々塩コショウ。月桂樹の葉も入れる。そこへ魚をブツ切りにして入れる。白身魚なら鯛から鱈までなんでもいい。イカ、エビ、貝類（あの黒いバカ貝とかいわれるムール貝ならなおいいが、なにシジミ以外ならなんでもいい）も加える。そこへオリブ油をたっぷり注ぐ。さらに白ワインをたっぷり注ぐ。この両方だけで今まで入れた貝の上までカブルぐらいの量でもいいが、それだと食べてる

だけで酔うかもしれないから、少し水を加える。ともかく材料がひたひたの水分にかくれたら、これだけは少々高価だが、サフランの糸切りを入れる。量はま、適当。そして火にかけ、ぐらぐら煮立って、魚たちに火が通れば出来上り。食べた人はおいしい、といってくれるが、ま、これだけのもの使っておいしくなかったらおかし。

⑤スパゲッティ・若者のアイドル風。有名な「壁の穴」のコピー。ニンニクをブツ切り(?)にし、ベーコン、太いソーセージを乱切り、ほかにピーマン、トマト、しめじを乱切りにして、強火ですばやくいため、ショウユ、コショウ、タイの唐辛子で味つけ。そこへゆであげて、オリブ・オイルをからませたスパゲティを入れるか、逆に両者をめいめいが自分の皿の上でませるかして食べる。

⑥白菜とベーコンのスープおよび白菜とブタコマの味噌汁。両方とも味噌汁を除けば同じこと。ただしスープにはスープの素のほか、トロケル・チーズとやらを加えた。(だから味噌汁みたいに濁った?)

(今月の外国食) かけ足でソウルと釜山へ行った。焼肉は毎回網でなく鉄板で焼いた。それも塩・コショウで食べるのと、甘い味がついているのがあった。釜山の商店街の一角で、年とったオモニから熟した柿を買った。はじめて百ウォンでほしいといったら、店にいた何人もの女性たちと顔見合せて苦笑い。ニコくれた。すぐ食べたらいししかったので千ウォン買って、一行と楽しく食べた。どこの国へ行っても買い食いといち食い歩き食い(?)が何よりも楽しい。これもまた少年の日の「太鼓焼き」歩き食いの後遺症なのだろうか。

(田川律)

一年の終わりに

12月1日、日記・のようなものの最終回。

水牛楽団は矢川澄子作（者兼ウサギ）「小兎のおよめさん」で休業明けとなった。とりあえず、西沢幸彦・八巻美恵と3人で。かんたんな楽器と声をつかう非専門家的（ここがポイント）集団としては、いますこしできることがありそう。来年2月末には「国歌を考える会」で岡山にゆき、5月末にはNOISEと合同で北海道をまわる予定だから、それまでは存続しているでしょう、すくなくとも。

たった半年前にかいたことをもう裏切って、シンセサイザーに手をだしている。それも安くて軽いことをメドにして。電気大正琴からエフェクター、

テクノロジをうえつけてやるのだ。

（しかしこれはいくらかは、シンセやワープロにおくられて熱中していることの正当化にちがいない。）

三宅榛名とのDUOを来年1月から毎月一回のペースでやりたいとおもって、渋谷のT A K E O F F 7を1月21日にとった。コンサートというかたちでやれることは、ますますかぎられてきたような気がしている。ほかのやりかたがみつかるまでは、スタジオ公演の可能性をためしてみるつもり。現代音楽の作曲家でいると、年に一曲もかけば存在証明ができるし、ピアノでも数回のコンサートで充分だろうが、バンド・ミュージシャンはそうはいかない。クラシックの音楽家としていつまでも他人の音楽をやっているのは、自分の音楽はついに見つからないような気もしてくる。ピアノという楽器で自分が何ができるか大体わかっ

シヒンセ、シンセパーカッション、ミキサー、MTRとすすんで、いまのところはどれも10万円以下のものだったが、音源モジュール、リズムマシンともなれば、そうもいかないだろう。一九六八年から七七年までつかっていたキカイ類にくらべてはるかに安定した性能をもつようになったこれらの安もの組み合わせで、どうやって不安定な音をつくるかが課題だ。世の中がひとわりテクノを終わって、さあアコースティックの見なおしだ、といっているときに、水牛楽団の楽器におもちゃっぽいシンセをとりいれようというのは、いつもながら逆行している。（と、ここまでかいたところでワープロの練習でもしてみようと、坂本龍一

の原稿を打っているうちに朝の4時になってしまった。）

したがって12月2日、こうなればついでだから、この原稿もワープロでか

てきたから、すこしほかのことをしてきたのだ。

パフォーマンスにみんなが興味をしめすのも、それが何かという定義はともかく、自分の領域をドアのように出入りしたいというおもいがあるからではないだろうか。

自分の音楽をもつということは、なかみだけのなしではない。そのプレゼンテーションやプロデュースもふくめてのことだ。それぞれが自主製作レベルをもつことだ。このこともわかっていたつもりだったが、DUOのときには、そこまでやらなかったところがよくなかった。やはり、むかしの芸術家風がぬけていないのだ。

11月27日、古屋能子さんの一周忌をかねた出版記念会があった。つきあいのひろいひとただけに、おもいがけない人たちの顔も見えて、古屋さん自身がいないのがふしぎなくらいだっ

いてみよう。

おおきなキカイとちいさなキカイはどこがちがうのだろう。テレビは情報社会の支配メディアだが、ビデオアーは電話のように個人のあいだをつなぐ。コンピュータ印刷はいまのところ大会社への集中手段だろうが、ワープロのめざすのは自主出版物の回覧ということになるだろう。自立など幻想だといってしまえばそれまでだが、そもそもすべてはゆめではないか。

如月小春がいうには、むかしのキカイはおおきくてギクシヤクしていた、いま不細工なのは人間だ、キカイはちいさく精巧でなめらかにうごく。そういわれてみると、さすがに世代のちがいを感じてしまった。ワープロやウォークマンがムシのように増殖してゆく情報社会に対抗するためには、やはりこれらのムシたちを飼いなさなければならぬだろう。かれらにちがう

た。最後に入院するまで毎月新宿歌舞伎町の喫茶店で会って水牛通信をわたしていたのがなつかしい。おばさんこのデートをたのしみにしていたのだろう。ひとつきのあいだに起こったことは全部はなしてくれて、おかげでこちらは集会や会合にいかないですんだのだった。ふつうの人として市民運動のめんどろをすすんでひきうけていたが、おばさんは運動に期待をもってはいなかった。だが、希望をすてなかった。活動家たちを信じてもいなかった。だが、見ずてはしなかった。マネできないことだ。

今度の本の表紙に米倉齊加年がかいた美少女の顔は古屋さんの顔立ちで、きつとわかいときは美女だったのだ、もしかすると死ぬまで自分の顔のイメージはそのときの少女のままだったのだ。男たちは歳月をこえたイメージの力のとりことなった。（高橋悠治）

行ったり来たり 最終便

十月十八日 世田谷区役所視聴覚ライブラリーで「みちことオーサ」の試写。区民の誰か？の要望で一度観せて欲しい、良かったら購入したいのと。いいと思うけどなー。

就健が間近になってきて、夜はその会合。今年は「障害」児を持った親と共同行動になる。拒否者が九人もいるから市教委はどう対応するだろうか。楽しみだ。

十月十九日 雑居まつり反省会。終ってから武蔵野美大の及部克人さんと青林舎の山上と飲む。及部さんとは一年振り。僕が手渡した「水牛通信」も久し振りにらしく喜んでいた。

十月二十日 息子の通う公立保育園

の父母会の役員をやっていることから今日は市の助役との話合いで司会をやらされる。それにしても役人のアタマの硬いこと。

十月二十二日 三鷹「やさい村」の立川農場を撮影する。青々とした大根の間引菜がなんともおいしかった。

十月二十七日 共同保育所「にんじんの唯一の保父さん鈴岡君の引越越しを手伝う。三日前の夜半、騒々しく鳴るサイレンの音に眼を覚まし、どこが火事だろうなど思っていた、その場所が彼のアパートだったとは——。彼の部屋の真反対側が火元で幸いだったとは云え、火元の焼死した女性ほんとにも気の毒だ。近所の人の話ではガス自殺ではないかという。焼けただけた部屋の中を覗いてみて、ひとりの生死のドラマ、他人をも巻き込まざるを得なかったその女性の半生を想像して切なかった。

十月三十日 秋に撮った映画の編集に入る。一年振りのフィルムの手ざわりは最高。見かけはダン昆布みたいだけど、この味がなんともいえないのである。

十一月三日 つれあいが福音館の「母の友」に七五三の写真を載せたからという訳ではないけれど、うちの息子も今年は……ということ、ジャンパーで正装？して神社に行き記念撮影をした。

十一月四日 青山学院大の学園祭に映画とパネル・ディスカッションのイベントに招かれ出向く。金井律子さん康治君も来ていて、打ち上げて一緒に飲む。「どきゅめんたりえいがをとり飲む」と文字盤を指して僕に語りかける康治君。「どんな？」「やんまじゅくのびいあるえいが」——やんま塾とは彼の学校以外の居場所なのです。母親の律子さんは「私は康治と共に生活

すること、四十にして初めて生きることの大事なことを教えられた」「就学闘争が全国の運動のシンボルとなった時期、正直いってやはりしんどかった」と語っていた。飲ませる方も悪いが、康治君は酒に強い。

十一月九日 ソニー・PCLで第一回音付オールラッシュ。撮らせてもらった各々の人が一堂に会する。

十一月十二日 藤沢市立村岡小学校の名取センセが行う公開授業を映画に撮るべく準備奔走する。二月の公開授業に参加して以来、映画に記録しておきたいという思いがとうとう現実化す。物事は動き始めたし、もう後にはひけない。

十一月十六日 録音の本間喜雄さんと何人かのスタッフで村岡小へ。名取センセとは初対面にもかかわらず、スタッフは皆心魅かれていたみたい。そこがおもしろ学校のおもしろセンセ

たる所以かなと変な納得。

十一月十八日 下北沢のスズナリ一番館で久し振りに土本さんと会う。めっきり白髪が増えたみたいだ。気のせいだろうか。

十一月二十一日 『海盗り』のカメララマン清水と村岡小へ。明日行われる公開授業の準備と名取センセへのインタビューを撮影する。清水とは同じ土本プロで過していた頃助手同士で、いつか一緒に映画を撮ろうと言いつつ仲。今回はその夢が初めて実現した。ラッシュが楽しみだ。

十一月二十二日 百二十二人も参加した公開授業。あまりに人が多くて、撮りたいものも思うように撮れないといった状況。参加者が多いことをどう評価していいか戸惑う。有斐閣から単行本が出たのが一つの要因だと思っけど、教師の実像がなかなか見えにくいいまの状況を反映しているのではない

か。名取センセは外に向けて素顔をふり撒いている数少ないセンセだ。それが等身大であるかどうか、それを求めて参加するというのが真相だろう。しかし、賑わえば賑わうほど学校内での彼の同僚への配慮、立場は険しくなると思うのは僕だけだろうか。とにかく映画に記録してみた。たった二日間の記録だけど、今年いっぱいには何とか作品化し来年早々には公開したいと思う。僕にとっては自主作品第二作目、第二ラウンドのはじまりです。

映画を撮りたい撮りたいと言いつつきて、最終号でその夢が実現して本当に良かったと思っけ。この連載によって、僕の友人は確実に増えた。編集部で付けてくれた「行ったり来たり」は僕の日常をよく言い表していたし、いまでは愛着の持てる言葉として定着してしまった。(西山正啓)

名僧・日記

十月二十四日 水牛通信の原稿が遅れ、速達にしようとしたら、郵便局のおじさんは、「オショウ、急ぐなら電子郵便でもんがあるンネ。書いたものがそのまんま相手に届くダジ。オモシレエデやってみまショ」と売りこみをかけてきた。田舎の郵便局のオジサンの口から、電子なんて言葉を聞くと「ドキッ」とするが、好奇心一杯、初物喰い自認、そういう類いはキライではないからやってみようとしたが金がない。一枚五百円なのだ。断念、残念しかし、今月号もいまごろ（十一月二十五日）書いてる位だから、いよいよ電子郵便のお世話になるかな、と、内心少々ウキウキしている。

女の子。兵庫県出身。新郎が学生時代、この寺に居候していた縁で、仏前結婚式を申し出て来た。ほいから、ついでに仲人もお願いしますときたもんだ。仏前結婚式なんて、エート、確か十年前に一度やったことがあるナ。あれはタシカ、俺自身の式だったから、何にも覚えちゃいないしこまったもんだ。「仏前結婚式の手引き」などという本を引っ張り出して、しっかり研究したが新郎新婦より仲人の方が緊張し、入れこんでいる。

木魚や線香は豊富にあっても結婚式に必要なものがない。前日からあちこち借り回る。金ビョーブは、落語会から。三々九度のお銚子は、市内の某有名神社から。今月もセクトの違ひを見事に飛び超えた。それがまた、この神社の神主がオチョウシ者で、口先だけで食べているという感じだった（この時は自分の存在を忘れていた。そうい

十一月一日〜七日 銀座の街角で、お地藏さんを書いてる障害を持った友人の画家、小川安夫さんの個展を手伝う。松本では初めてなのだが、身内ががんばってほぼ完売。小川さんは一週間我が寺の住人となり、毎夜晩酌をおつきあいさせてもらった。

十一月七日 木曾福島へ研修旅行の打ち合わせに行く。坊さんも研修する時代になってきた。今回の研修は、若手ばかりで九州博多の夜を見学し、フグを喰おうというもので、今までにない実り多い研修会となりそうだ。（仕掛はもちろん私）

十一月八日 飯田へ、母親の運転手として、行く。飯田は静かない街だが、列車の便が至極悪い。何でも日本のチベットとか……。

十一月九日 上高地。山岳遭難者慰霊法要。超宗派青年僧の組織、その名も高き、中信地区仏教青年連盟（代々

十一月一日〜七日 銀座の街角で、お地藏さんを書いてる障害を持った友人の画家、小川安夫さんの個展を手伝う。松本では初めてなのだが、身内ががんばってほぼ完売。小川さんは一週間我が寺の住人となり、毎夜晩酌をおつきあいさせてもらった。

十一月七日 木曾福島へ研修旅行の打ち合わせに行く。坊さんも研修する時代になってきた。今回の研修は、若手ばかりで九州博多の夜を見学し、フグを喰おうというもので、今までにない実り多い研修会となりそうだ。（仕掛はもちろん私）

十一月八日 飯田へ、母親の運転手として、行く。飯田は静かない街だが、列車の便が至極悪い。何でも日本のチベットとか……。

十一月九日 上高地。山岳遭難者慰霊法要。超宗派青年僧の組織、その名も高き、中信地区仏教青年連盟（代々

十一月一日〜七日 銀座の街角で、お地藏さんを書いてる障害を持った友人の画家、小川安夫さんの個展を手伝う。松本では初めてなのだが、身内ががんばってほぼ完売。小川さんは一週間我が寺の住人となり、毎夜晩酌をおつきあいさせてもらった。

木系ではない）が初めて試みた。北アルプスで遭難死した岳人はすでに五百名を数える。この中には僕の友人や、また、落雷死した十一名の後輩も含まれている。二日後に閉山を控えた上高地は、ほとんど観光客がいない。空気がこまやかで、透明で、冷気が毛穴にビッシリと入りこんでくる。上高地に来るのなら、この時期をお勧めします。「山に祈る」塔の前で読経。十二名の読む般若心経が、真白な穂高の頂に届きそうに思える。聞こえたかい？

十一月十八日 大安吉日の日曜日。快晴。おめでたいを絵に書いたみたい

な日。今日は生まれて初めてのナ、ナ、仲人さんをやらせてもらえる。期待に胸が高鳴って、思わずルンルン、スキップしちゃう（いい年した坊さんが、コロモを着てスキップなんて……オエッ）新郎はフェュージョンバンドのキーボーダー。福井県出身。新婦は普通の

十一月二十一日 新郎の郷里福井県は雪深い大野へ行く。郷里での披露宴にひっぱり出されたわけだが、何しろ、親せきや部落の人達が三日三晩祝い酒を飲み続けるという話を聞いていたから、興味津々で出かけた。今までのいろんな形の披露宴を見てきたが、ここの宴は、タイムカプセルで百年位スリッ

プダウンしたみたいで、近年にない大ヒット。今度僕がする時は、福井式田舎流自宅開放型飲み放題の結婚式にしようと思った。人間同士のコミュニケーションは、ホテルのお定まり披露宴では決してつかめない。大野の披露宴は、地域の間同士のきずなを結びあうための方便なのだろう。とっても豊かな気分が福井を後にした。もう、雪

だるうナ。

（高橋卓志）

野球のユニホーム姿の低学年の男の子が二人、小さい自転車で並んで、私の自転車の前を行く。

「あいつ大きいんだ、二五・五だって」と右側の男の子がいう。あ、そりゃ大きいよね、

子供で二五・五は、と聞いていると、

「え、体重が？」と左の子が答えている。二五・五といったら足の大きさに決ってるじゃないの、へんなのとぼんやり思う。

「ちがうよ」と右の子がいう。ほらね。なんで体重なの？ 何いってるんだろ、左の子は。

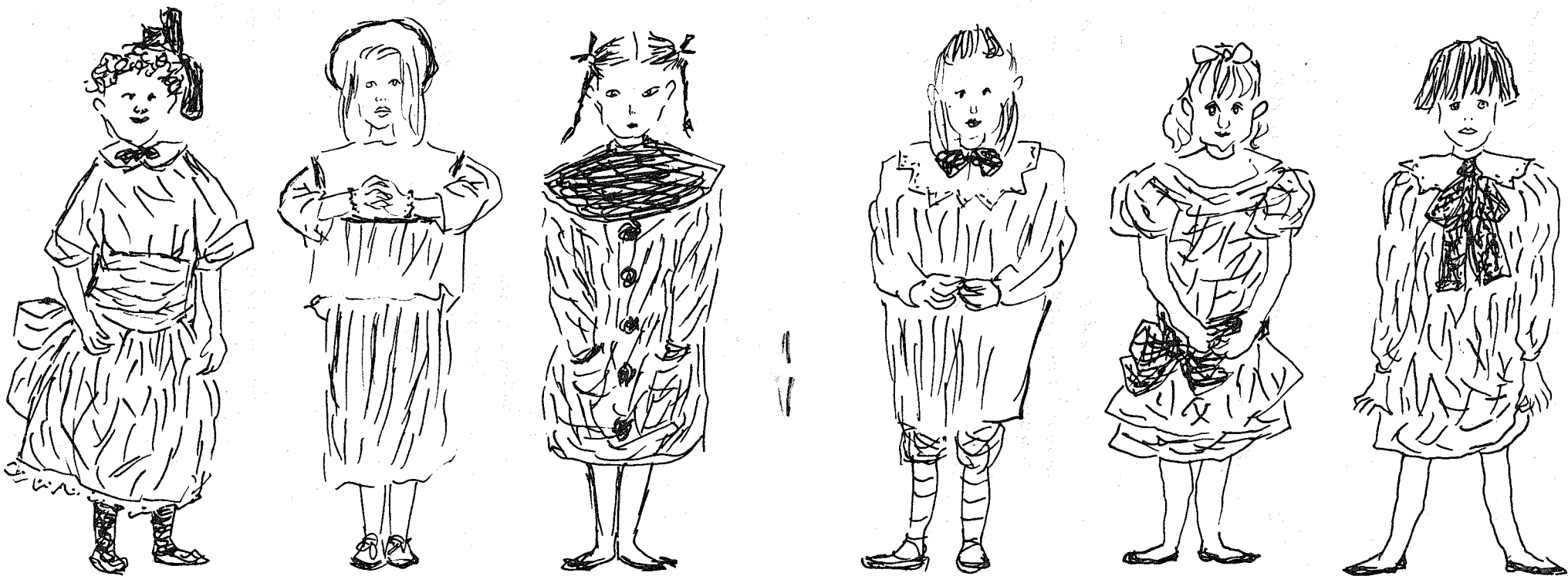
「え、あ？ ああ身長ね。オレ一三六だよ」今度は、身長だって、どういうこと？

「ちがうよー、足の大きさ」

「あー？ ああ、アーシー。足の大きさオレ知らない」ほんと？ 足の大きさ知らない人っているかしら？

それにしてもトンチンカンなやりとりと思っ
て、子供たちを追い越しながら、突然わかった。どうして体重だの身長だのがでてきたのか、謎は解けた。あのぐらいの年齢の子だったら、二五・五というのは体重であり、一

二五・五という身長でもあるわけだ。
「そうよねえ、そうよねえ」と思わず声に出して、あんまりあたりまえだから笑ってしまった。



獄中から――

桜庭さんの手紙

10・17、84

八巻美恵様

秋も深まり、寒いほどの朝夕となりました。獄には、やがて冷凍地獄の季節がめぐってきます。社会でも、管理性は一層たかまり、八巻さん方の生活も様々な形で権力からの干渉に脅かされていると察します。

この四年間余、『水牛通信』でどれほど勇気づけられ、教えられ、楽しませていただいたことがわかりません。ビサヤ地方でしたか、フィリピンの農民一家の生活のスライド写真を特集した号がございましたね。目をつぶりますと、あの写真の数々は今も鮮明に、一枚一枚は、きりと浮かんで参ります。

虐げられ、追いつめられて、廢屋よりひどい小屋に住む農民の人々。あの表情、あの素足、あの歩き方、あの目差し、あの笑顔と絶望の静かな顔……忘れることができません。

呆けたように大きなビル建物によりかかっている失業中らしい若者たち。あれはマニラ市内でも、いつも見慣れた風景でした。ふと目が遭うと、ニツとはにかんだ笑いを返してくる無邪気な若者たちが、一体なんで貧苦の上、栄養たっぷり太ったエリート人民の警官や軍人に迫害されねばならないか、当時の苦い怒りが蘇ってきます。

あのスライド一枚一枚が、今、哀しいほどになつかしいです。荒屋の日向の外壁にそってなにやら立ち働いている、生い立ちからの貧苦のため虚弱化している老婆の姿が、母の姿と二重写しになって胸をえぐります。一家最大の財産である豚の体をみ

つめる、つぶらな瞳の少女……。

あの号は一九八一年のものでしたか。肝心のスライド題名を今、度忘れしています。短かい、なにやら皮肉めいた警句だったような気がします。あの号は昨年当所に移されるまで、東拘では手許において、疲れると、いつもみつめておりました。あの号は、私の政治感覚の原点でした。私のいつもぐらついていた政治信念を元の軌道に戻してくれたものです。あれらの写真は今は現物なしでも、脳裡に焼きついております。当所では「余分なもの」は一切手許所有が許されません。原則は東拘も同じでした。しかし、交通法規を法文通り守れば社会パニックが生じると同じで、東拘では原則の適用は、私が拘留されていた間は、かなり自由でした。

八巻さん。私は今、「懲罰」中です。病舎「懲罰」のため、文禁（図書類新

聞等閲覧禁止）のみのため、こうして手紙は出せるのです。私は6・25より結核再発して入院しております。血痰は4・13より吐いておりましたが、筆読制限される入院はどうしても避けたかったのです。「罪名」は「不正運動」と「抗弁」で、25日間も下さいました。あと一週間後の10・23朝、解罰となります。「懲罰」と同時に（処遇の変更を言い渡す。ラジオ聴取を禁ず）も生じておりますので、ラジオ唯一の楽しみ、ニュースも聞けず、社会情勢に疎くなっております。

こうして20日以上も、一切のニュースから疎外されておりますと、面白いことに、心細さが強まります。20日以上、新聞から離れたことは、今回が初めてですが、これまでの10日と20日間の「懲罰」では、新聞記事で、戦争や交通事故など様々な事柄から多数の人命が失われていることを知り「安堵」

するという、とても奇妙な体験をしております。多分、私は小心なので、自分の「死」に対して、心細さを感じているのではないかと想像しております。（「干渉」がなく、自己沈潜できているときは、「死」はいつも親しい友なのです。環境はとても大切です）

それにしても「懲罰」は収容者を心細くさせる点で威力ありますが、私の初犯刑ではこのようなことはなかったと記憶しております。初犯刑と再犯刑の両方を体験しているわけですが、獄にはつねに笑い声が絶えませんでした。今は、外掃の人たちも作業中、しゃべると叱られております。もう26と23年前になるわけですが、当時は口の悪い囚人が看守を「牢番ッ！」と罵倒したりしていました。今、こんなことを言ったら「懲罰」です。

初犯三年間を通して、私は看守上りに、暖かい行為しか思い出せません。

看守はまず若い二十代初め、または十八、九歳の新任看守が囚人と一番接触しますから、やはり前後十年間の教育は正しかったということでしょうか。また、六〇年代高度成長期、日本人は史上初めて繁栄さを体験したため、経済効率至上主義となり、それが無能力者への恐ろしい蔑視差別感を育んだとも考えられます。看守が囚人に対して「乞食野郎！」と罵るといふことがありますが（東拘でのこと。当所では看守は囚人とは私的事情では口を利きません）。このことは、やはり高度成長期の社会思想の残滓を示すのではないのでしょうか。看守が収容者を乞食と罵倒するなど、初犯時には想像もできないことでした。

近年、看守の弁護士への軽蔑が著しいですが、これは看守らの知識に対する尊敬不在なのでしょう。また、この20年間、対民間比で甚だ

しく高まった公務員の給料が考えられます。初犯時、看守の給料は薄給の代名詞である公務員の中でも特に安く、大半の看守の奥さん方は内職の封筒貼りなどしていました。こんなこと、今の若い看守は想像できません。最低の七等級から特一等級までまったく同じ給与体系を持つグループでも、看守と国家警察職員の場合、「下士官」及びそれ以下の四等級と七等級の給与は、検察庁関係や国税庁関係よりかなり高級です。面白いことに、「士官」クラスである三等級以上は、監獄も国税庁も検察庁も、すべて百職級近い給与にピッタリと一致しております。

退職後も手厚く恩給法で保護されている経済的安定度の強化が、看守らに不安定な収入の知識人への軽蔑を生む一つの理由になっているのではないのでしょうか。オーバー・ドクターなど、20年前は想像不能でした。

しても身体清拭は「懲罰」になるということから当り前でしょうが、当所の特徴は、所長ら最高幹部の部下に対する監督が徹底していることです。このため、部下職員は「手を抜く」ということが、まったくできないのです。

東拘でも、私は処遇改革の急先鋒であり、二千余人の収容者のうち、収容者への暴行障害で所長らを告訴した十数人の一人でした。このため私の房のみ、頻繁に、不合理きわまる五、六人の看守による強制捜検を受けました。しかし、これら看守は上司の指示でやむなく行っているというのを、いつもその簡単すぎる操検ぶりで示してくれました。私の房には規則違反の図書やパンフ類が山積されていたのですが、それらには一切触れてくれませんでした。たまに片付けるよう注意されるだけでした。

当所では、一枚のパンフでも貴重な

つい20数年前は、英語が自由に使えるというだけで、それに看守が気付くと感心したものです。今は外国語の二つや三つマスターしていても、そのみでは生活できない社会のようです。大変な管理社会になってしまいました。管理社会の行きつくところ、「お上」に犯行すればメシの食いはぐれ、餓死に結果するのでしょうか。この点

不信を政治の原点としている欧米は正しいようです。風景を鑑賞するにしても、私たち日本人は、今更ながら、古い建物や町並みの保存に努めてきた欧米人に感服します。当所では、風景を眺めていても叱責されます。八巻さん、私はついに当所と国を告訴することにしました。

本年一月に決心したのですが、文字書き不能のため、下書きするのみで、決心しかねていたのです。しかし、最近、文字のきれいな方より清書してい

ただき、一挙に解決しました。あと20枚くらい残っておりますが、来月中に告訴手続きは完了します。このためか私への風当たりが強くなり、「反抗囚人」でも、どうやら最悪のクラスへ編入されたようです。

つい最近まで認められていた送金以来の特発（特別発行。刑事訴訟では、被告人は一日二通に加えて特発二通の計四通が許されており、東拘では特発は「礼状」として無制限に許されます。本年初め頃より（昨年？）、電報も書信として扱われるようになりました）も、「他の書信は緊急性がない」との理由で不許可にされております。やがて一通もなくなる日がくるようです。

当所の既決囚は水曜日以外にはタオルを洗うこともできません。今朝、私がタオルを洗っていて、若い看守からとがめられ、あやうくタオルを没収されるどころでした。真夏、いかに発汗

労働時間を費やして発見に努め、没収します。最大の反経済則は、「水牛通信」などの差入れパンフ類がすべて自動的に領置されることです。訴状で明らかになりましたが、これは大変な職員労働を費します。法には、パンフ類は手紙と同一の扱いをすることができ旨の規定があり、東拘などはこれを援用しております。収容者の不便をしいるため、膨大な職員労働を用いております。

慣習はアヘンと同じ力を持ちますが、所長らには別に「不祥事」は絶対に発生させたくないという病的、というより病気のものの保身願望があります。東拘で、過去数十年間、無数の人がやってきたことを、短期で私一人（他に数人、既決囚が告訴しましたが、結審しておりません。また、私の場合より訴因が弱いようです）で行うということになっておりますので、犠牲は不可

避的だと思います。他施設、または一般公務員しか知らない人は、当所の職員は東拘式に徹底してやらなくても、昇進しただけで失業の心配はないと考えがちですが、実際問題として、そうではないらしいのです。正面から首切りということではなくても、精神的に勤務不能の状態に置かれるようです。所長（実際は部長ら部下）の性格です。

八巻さん。東拘の秋山芳光さんへの「水牛通信」の贈呈、有難うございます。秋山さんとは東拘の三年六カ月、すぐ近くの房で、よく顔を合わせました。私と同年の55歳です。今、死刑を上告中で、今年内には確定するようです。罪状が大きくて誤解されており、その点、お気の毒です。お会いしてわかったのですが、とても他人への配慮篤い方で、なんで殺人、それも強盗目的で行ったのかわかりません。私自身

同じ罪名で、そのようなことは言える筋合ではありませんが。魔がさした、ということでしょうか。

私が強いられた手術はCL（チングレットミー、前葉状因切除術）ですが、裁判調書にある病院の手術名は「両側前頭葉部分切除術」とあり、旧式のLB（ロボトミー）と殆ど同じ名です。

私はヒト個有の巨大な新皮質の下にある古い旧皮質の大脳辺縁系の情動回路の切除と信じていたのですが、そしてF医師よりその旨告げられており、事実、その通りらしいのですが、「前頭葉」とは新皮質のことであり、わかりません。今更、切られた部分を知っても、どうにもなるわけはありません。

しかし、もしLBと大差ないなら、今の文字書き不能も納得できます。逮捕直後は立派な文章を書いておりました。20年目となり、進化したということ。素人では、難しいこと、わか

りません。私としては手術の日「11・2、64」が自分の命日と思っており、35歳の享年。多くの天才と同じで、慰めとなります。こういう発想自体、CL蒙祿というのでしょうか。

*

八巻美恵様

10・25、84

(…)三日前の10・23朝、解罰となりました。早速、「水牛通信」を交付して戴きました。驚いたことに、私は59号は拝読していなかったのです。60号は「懲罰」直前に交付してもらい読んでおります。59号に私の拙い手紙文を掲載させて戴いており、全身が熱くなる歡びに包まれました。同時に、いかにこわれた頭にしろ、あまりに拙い文へへの恥ずかしさで、深い自己嫌悪を感じました。私の野郎自大的な自信の

深さは、CL後も変ることなく、このような自己嫌悪感はかつてかつて体験したことはないのです。

この五年間の拘禁のうち、5%にも満たない入病後の後半の二カ月で、私の精神は大きく崩れっぱなしのようです。私の最大の取柄であった病的に強い「やる気」あるいは創造性といったものが消えてなくなり、従来と違って「一晩寝たら元通り蘇った」ということはなくなりました。初老期特有の鬱が、ようやく異常性格の私にも人並みに定着したということのようです。

あらゆることに自信なく、判断にためらうということは、私の人生で初めてのことです。このような個人の心身変化など、他人に語っても決して伝え得るものではない、と充分弁えておりながら書いてしまおうというのは、われながら驚いております。知力の低質化と思えます。

精神がこわれるその瞬間に、自覚はないようです。今月に入り、朝、洗顔中二度にわたり、同一看守によりタオル洗いをとがめられ、烈しく叱責されたこと、そして、タオルを引き渡すよう執拗に要求されたことが、「崩壊」のきっかけになったようです。

私は入浴もまだ二回に一回しか許されておらず、散歩運動も不許可です。病氣回復にはおだやかな精神状態が不可欠であるにもかかわらず、敵意に満ちた濃厚監視で一挙手一投足をあげつらうということは、官にとっても、回復を遅らせてマイナスであるのです。しかし、当所では医療も酷薄な保安則の支配下にあります。私の告訴意志の表明以来、看守による罵倒はかなり減りましたが、陰湿な差別根性は微動だにしません。比較的好ましい心の看守方の存在で、辛うじて精神のバランスを保っているという有様です。

特に私は顔を他人に見つめられることに恐怖に近い嫌悪感がありますが、それがこの二カ月ほどで甚だしく薄くなっていくのに先日気がついて、愕然としました。逮捕以来、長い間、プラ

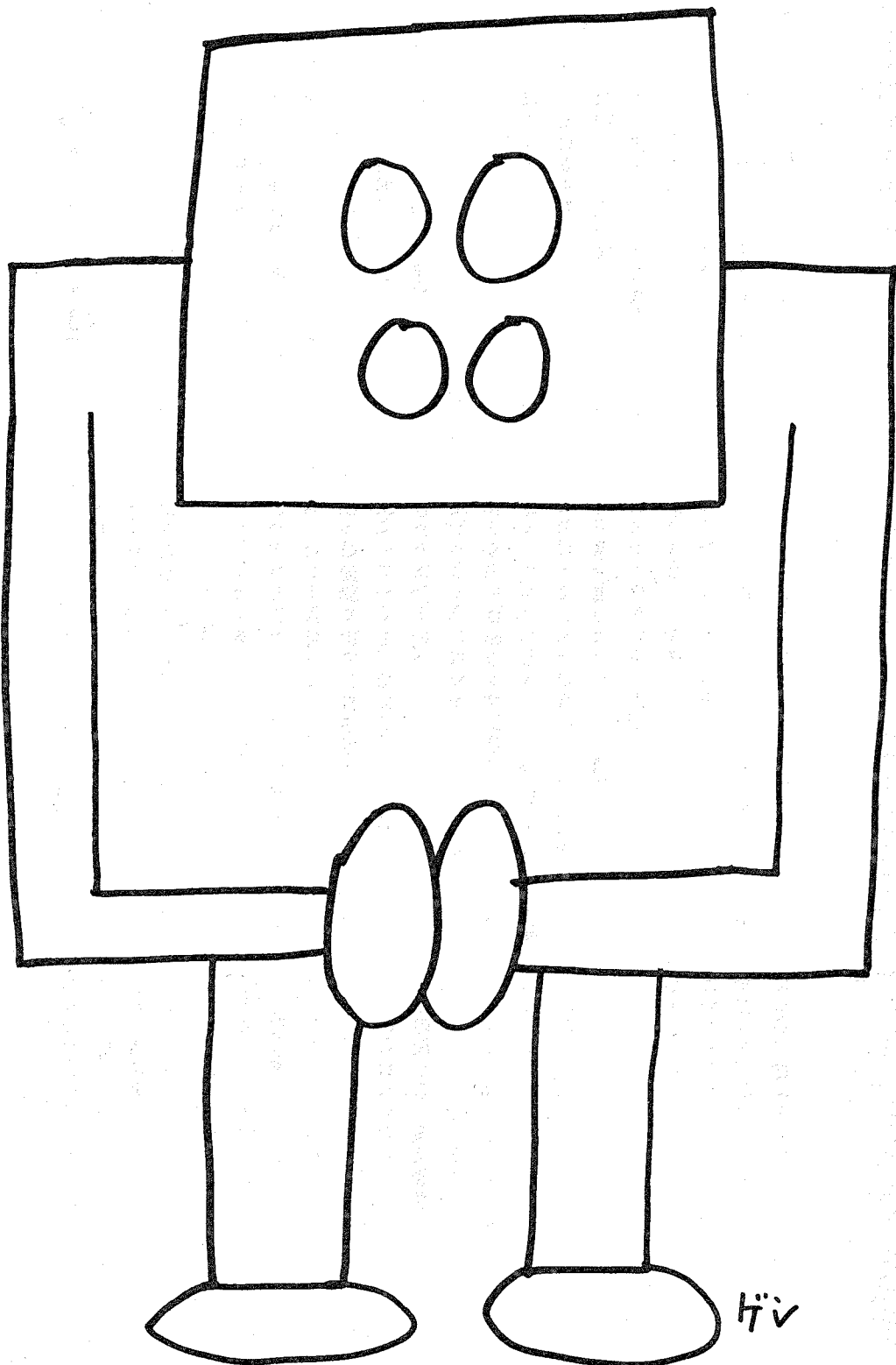
イバシーを死にもぐるいで求めており、当所移管後もつい最近まで、その充足不能からの苦悶は烈しかったのです。その苦悶の低下は好ましいことなのですが、私が愕然としたのは、CL直後、十代からのSUB（禁欲台葉）の苦痛がすっかり消えていることと、さわめてよく似た感情に襲われたからでした。

不潔恐怖症のため、私には昔から朝の洗顔時に、首筋を濡れタオルで清拭する習慣です。これが禁止されることは恐怖です。既決囚のみ週一回、水曜日にタオル洗いが許されていて、未決囚は自由に洗えるのが当所のキソクですが、この重症病棟では未決囚は私

一人のため、新来看守は間違えたようです。

しかし彼は、全収容者は同一の処遇にするべきだとの個人的信念から、私のタオル洗いをとがめます。そして、このような「些細な」囚人いじめでは譴責されませんから、中止することはありません。いつも私の房の前に張りついて、私を監視しております。ポールペンの替芯を手にしていても、「何だッ！ 見せろッ！」と要求します。獄というより、精神病院の世界です。

「懲罰」審査会で、審判長役のO管理部長にこのことを訴えても、「当たり前だッ。看守はお前らを監視するのが職務だッ」と感情的に答えます。そして「懲罰」25日です。人間の住む世界ではありません。私の告訴に対する嫌がらせもあり、告訴されるよりは、「自死」された方がよいと考えるが伺えます。



以上、不愉快なことを書き、申しわけございませぬ。獄というコトバは思想、社会状態の如何を問わず、嫌悪感をあたえるものです。健康な心の市民は、いかなる事情があるにしても、犯罪者には烈しいアレルギーを持ちます。自分の社会人時代を顧みて、そのように感じます。

三日前に「水牛通信」62号も戴きました。東拘のように自動的に検閲し領置して、「下付願」を提出し、そのあとも削除や抹消に同意する「交付願」に指印を押したり、煩わしい手続きがありますので、当所では、かならずしも順番に入手できるというわけではありません。これらについても、来月、私が提出する「釈明書」の中で詳述しました。獄のことなど不愉快とは思いますが、廃人処遇の一端を垣間見て戴ければ有難く、来月中にQ.Cの田中さんを通してコピーを郵送しますので、

どうかお読み下さい。

先日、週間朝日10・26号で水牛楽団の演奏予定の紹介記事に接して、その成長に驚きました。水牛楽団の興隆には、モンコンやスラチャイさん、カラワン楽団の方々も大変元気づけられてゐるのではないのでしょうか。62号で、高橋悠治さんが紹介していますが、タイの政情には暗然とします。カラワン楽団の方々も、日本の言論の自由がいかに無力かということに驚いているのではないのでしょうか。

いつ頃から、この国の知識人には言いにくいことは命をかけても言うという伝統が消えたのでしょうか。政治犯の殆ど全員も下獄すると告訴をとり下げ、獄闘を止めておとなしくなり、工場出役しております。出獄後も活動をするため健康を維持する義務があるというわけですか。下獄しても告訴をとり下げず、頑なに処遇改革を求める刑事

犯は、官から「過激派でも満足して、おとなしくしている。この刑事犯はアタマがおかしい」として、徹底した虐待を受けています。

この国もいつタイのように、いや、つい四十年前の状態に逆戻りしないとわかりません。

八巻さん、今日再び（一字不明）となり、月曜日「懲罰」審査会にかけられます。非常に面白い論理が支配する世界です。大変な乱筆での乱文、申し訳ございません。大変に有難うございました。敬具。

（桜庭幸司）

わるいくせ

十一月十五日 夕がた、荻窪駅にはどちかい津野海太郎宅（と書いても貸賃マンションの一室）を水牛の編集委員を自認する何人かであつた。ひさしぶりの編集会議というわけだけど、ほんとの目的は、津野さんのワード・プロセッサをみて水牛通信の版下をワープロでつくってしまおうという相談をするにあつた。

なにかあたらしいことをはじめる相談は、いつだってアツという間に、かさんがえていた以上の過激さで、まともってしまふ。

次の日、新宿で津野さんと待ちあわせて、買う機種をきめ、その次の日にはもうさっさと注文した。予定では、

きりよく来年からはずが、機械がとどいてしまうと、もう待てないのだ。字のかたちだけでなく、来年は中身のほうもかわるはず。

ワープロに夢中だったから、というわけではないが、十一月号の発送は、おかれて十六日になってしまった。世田谷郵便局を出て三軒茶屋駅のほうへあるいていくと、なにやら不穏な空気がただよっている。もう夕がたちかくで、うすぐらいなかを、消防車のいやにあかるい回転ランプ（？）が、とにかく一つや二つじゃない、みわたすかぎり続いているではないか。世田谷通りと茶沢通りは、ただただ消防車のむれでそのほかの車も人間もとおることができない。発送のあと、ここからバスにのって下北沢へゆき、ワンラブブックスに水牛通信をとどけるのが、いつものコースなのにね、こりゃだめだ。

火事の現場の世田谷電話局は、だいがむこうで、煙のけの字もみえないが、こんな大量の消防車はみたことがないものだから、しっかりみていこうと立っている（ひとくちに消防車といっても、いろんなのがあるでしょ）こちらは世田谷警察署です、歩行者のみなさん、たちどまらずに移動してください、という放送がうるさくて、おちおち立ってはいられないのだ。

そしてその夜から、電話騒動は、はじまったのだ。ちなみにわが家の電話、つまり水牛編集委員会の電話の管轄は弦巻電話局で、今度の火事の影響で、「かかりにくく」なってしまった。かからないならかからないであきらめしようが、なにかのはずみでかかってしまうこともあるから、始末がわるいというものだ。用もないのに、かかるかどうか、かけてみよう、ということになる。運よく、たまにかかっ

てくるのも、まあ、用事というよりは、こちらと同じキョーミホニがほとんど。

で、いそぎの用のある人からは、電報や速達がといた。わたし個人としては、これらの通信手段のほうが電話よりも好ましいので、うれしかった。

二、三日たつうちに、田川律宅の電話とうちの電話とは、なぜかよくつながることがわかってきた。それで、どうしても連絡が必要なときは、まず田川さんに電話して、田川さんから相手に要件を電話してもらおうことにした。私設電話中継所なのね。でも、ワープロのはなしを破綻しかけた電話でやっている、なんていう図はいかにも象徴的でありました。

十一月二十七日 去年なくなった古屋能子さんの本『新宿は、おんなの街

である。ふれあいつつ、たたかいつつ』が出版された。水牛通信の「古屋能子さん追悼号」に載せた、当世風呂屋風景をはじめとして、風呂屋仲間の住んでいる町、わたしと新宿、非人間的医療体制との闘い、生いたち・女・沖繩・反戦、それにたくさんの書評、ともりだくさんの内容。水牛では出版元の第三書館（さまざま理由で新書書房から出版元が変わった）から預かって、販売しています。定価は二千元。送料はこちらで負担します。いつものように振替で申しこんでください。

この本の出版記念と古屋さんの一周忌をかねた集まりで、小田実さんの言ったこと。古屋さんは死んでしまったから、もう行動の人としてかんがえることはできなくなった、これからは思想の人として、この本をよく読む必要があると思う。

古屋さんの生前をしらない人も、こ

の本を読めば、古屋さんにめぐりあうことができる。

（八巻美恵）

下手の横吹き笛 日記

さてさて、約一年間つづいたこの連載も、今回で終ろうとしています。私の寝言のようなつづり方も最終回になるわけですが、特になにか別のことを書くのではなく、相変わらず、どのようなことを業とし、いかにいい加減に生きているかを、日記という形式で書くわけです。

十月十一日 渋谷ジャンジャン「きぬという道づれ」(番衆プロ)を観る。はじめて書いた劇音楽。不肖の息子の卒業式か。狭い舞台を上手につかった装置と主演の市原悦子が光る。

十月二十二日 朝十一時から一時まで日活スタジオ。羽田健太郎君の作曲。

民会館でレコーディング。夜、横浜の友人宅で練習。

十一月三日 横浜のタマ・プラーザ東急でコンサート。テレマンのターフェル・ムジック、クヴァンツのトリオソナタ他を演奏したが、例によって無音響のような部屋。そこへお客さんが入ったものだから、無残にも、まったく響かない。いつもの倍ぐらい疲れてしまう。へとへとになって終って、すぐ新幹線で大阪へ。乗ってすぐに目をつぶる。目をあけると、もうすぐ京都だという。乗りこさなくてよかった。

十一月四日 奈良に近い大阪の八尾という町の西武で、先日のユーロ・スペースのやつ、カラワンぬきのコンサート。会場には備えつけの舞台があったが、それを使わず、会場の真中に舞台をしつらえ、お客さんがぐるりととりかこむように作りかえ、結果的にすてきな舞台ができあがる。夜の新幹

夜七時からサウンド・スタジオ。年末から年始にかけてやる子供のミュージカルの録音。

十月二十四日 夕方五時から東芝。なんとか町内会のなんとか音頭。

十月二十六日 六本木ソニー。先日のミュージカルのつづき。

十月二十七日 渋谷ユーロ・スペース。カラワン歓迎コンサート。出演はスラチャイ・ジャンティマトン、モンコン・ウトック、矢川澄子、吉原すみれ、斉藤晴彦、それと「水牛楽団」。

わが楽団は、グリムと矢川さん作「小兎のおよめさん」——ちよっとむずかしい残酷物語。人前でせりふをいうというのは今回で三度目だが、何回やっても難しい。いざ声を出してみないとどあたりのトーンで出るかもわからず、どれほどの音量が出るかもわからないので、ほとんど出たところ勝負という感じでやってみる。八巻美恵さんの

線で東京へ。

十一月六日 十時から八木正生さんのコマーシャル音楽。

十一月七日 十二時から三時、アバコ・スタジオ。石井真木さん作曲のテレビのドキュメント番組の音楽。

十一月十日 NHK505スタジオ。三枝成章さん作曲のテレビ番組の音楽。

十一月十四日 五反田ユーポート。加藤登紀子さんのコンサート出演。民音の企画で、ゲストの津軽三味線と沖繩三味線の対決というか、お登紀が加わっての三つどもえ。

十一月十六日 十時から十二時までNHKでリハーサル。一時から六時まで大平スタジオで近藤謙さん作曲の英語劇の音楽。

十一月十七日 横浜で木管五重奏のコンサート。

十一月二十日 駒場エミナリス。アンサンブル・プラクティカ演奏会。ス

長いせりふを受け、ほんの二言三言だが、じつに落着きがわるい。ふと横を見ると、高橋悠治さんがなんとカンカラを頭からかぶって、そのカンを叩きながらせりふをいったりしてるものだから、もうダメ。目いっぱい行くしかないと思っても、力の入れどころがわからずカラまわり。難しいもんだ。

十月二十八日 本日もユーロ・スペース。昨日と同じプログラムだが、ゲストに坂田明さん、坂本龍一さん。

十月三十一日 三時からアバコ・スタジオ。アルトフルート、フルート、オカリナ、ケーナ、リコーダーと、できる楽器はほとんどいった感じで、池辺晋一郎さん作曲の劇音楽。なかでもオカリナが不安定で、音程はとりにくいし、小さなオカリナは指が重なりそうになって、たいそう吹きにくい。

十一月二日 作曲家・平石博一さんの新しいレコードを作るため、荒川区

トラピンスキーの「小協奏曲」、M・フェルドマン作曲「歪んだシンメトリー」。これがいやはや、なんと一時間四十分の曲なんです。ヴァイブラフォン、ピアノ、フルートの三人で演奏するのであるが、一時間ほどしてひょっとと客席を見ると、三分の一が寝ているというすごい曲でした。フェルドマンの曲で五時間間のあると聞きまし

た。どうやって演奏するのでしょうか。というような具合で、相も変わらず、今月も笛を吹いているうちに過ぎて行ったのでした。皆さま、長いあいだ、ありがとうございました。また「水牛通信」の方々にも、このようなつたないタワゴトを長期間のせていただき感謝しております。来年から新しい企画で——ということですので、期待しております。

(西沢幸彦)

ぼくが作った本

先月号を休んでしまったので本がたまってしまった。そうこうするうちに連載も今月が最後、一年の反省特集にするという話もあったけど、とにかく記録を続けておく。

●ビートルズ・ラブ・ユー・メイク上巻下巻、ビーター・ブラウン、ステイ・ヴン・ケインズ、小林宏明訳 早川書房。

●ドイツの人々、ヴァルター・ベンヤミン、丘沢静也訳、晶文社。ベンヤミンが集めた各時代のドイツ人たちの手紙。これからは電話じゃなくて手紙がいい。

●「秋葉原」感覚で住宅を考える、石山修武、晶文社。もう住居のことは考

えたくないのだが――。

●ピラミッドに自動販売機があった？
モノの文化誌、日高敏、晶文社。

●道化師のためのレッスン、小林信彦、白夜書房。小林さんの本、これで何冊目だろうか。

●キジも鳴かずば、谷沢永一、集英社。特辛口批評。このキジとはいったい誰れのことか。

●みみずの学校、高橋幸子、思想の科
学社。柳生弦一郎のイラストが絶賛された。タイトルの書き文字もかわいいんだけどね――。

●ビートルズになれなかった男、高尾榮司、朝日新聞社。なぜか年末になったらビートルズがやはりはじめた。リング・スターのいない珍しい写真が出てきた。

●子どもが友だちをつくるるとき、リチャード・ウイリス、片岡しのぶ訳、晶文社セレクション。朝日新聞の日曜版

にこのシリーズの記事があった。本の写真もあって、なかなかと自画自賛。

●宮沢賢治の理想、マロリー・フロム、川端康雄訳、晶文社。賢治が描いた岩手県と原子との関係図をカバーに使用。たくまざるイラストレーション。農民芸術概論の英訳が原文とくらべながら面白く読める。

●ロックの「新しい波」、パンクからネオ・ダダまで、グリール・マーカー、三井徹訳、晶文社。この本あたりから少しだけデザインの手法を変えようかと思ったのだが。

●怪傑ハウスハズバンド、村瀬春樹、原田治イラスト、晶文社。

●パンコクの妻と娘、近藤紘一、文春文庫。

●あずさのアドベンチャー80、中島あずさ、文春文庫。

●なぜ病気はおきるのか上巻、人間のからだと病気2、田中栄一、渡辺富士

雄イラスト、草思社。

●間違いだらけの大学受験、改定新版、宮崎尊、南伸坊イラスト、草思社。

●アルプス登山鉄道、池田光雅・武内豊・加山昭他、トンボの本、新潮社。

●ELLEフランス料理百科、竹内迪也・鎌田昭男、トンボの本、新潮社。

ひさしぶりにカバーの写真撮影に立ち会う。この本、雑学を仕入れるにはもってこいだ。

●トロツキーとの七年間、プリンキボからコヨアカンまで、ジャン・ヴァン・エジュノール、小笠原豊樹訳、草思社。トロツキーの秘書による叙事的な回想。巻末にドイツチャーをはじめ、関係書物の誤りの指摘一覽付。

●ヘラヘラ・マガジン、岩田健三郎、冬樹社。書店でとくとご覧ください。活字・写植はいっさい使わず（帯は別）小さな文字をよう書くよ。カバーはもちろん絵を使うよといったら、カバー

そのものが出来ちゃって、私としては寸法の訂正をやっただけ。岩田さんに

は脱帽。

●間違いだらけのクルマ選び85、徳大寺有恒、草思社。いつも年末になると

この本を作る。以前タイのバンコクで乗ったタクシーが日本車のボンコクで前で、そこいらを走りまくってる車もそんな程度。帰国して第一作がこの本の何年版かだった。むなしかったね。

●金属バット殺人事件、佐瀬稔、草思社。あのコワイ事件をおぼえていますか。金属バットの質感とよく似た銀紙

があって、黒一色のタイポグラフィで処理する。ところが銀紙の乱反射がものすごく印刷機のセンサーがいかれて、すぐ故障になる。おまけにインクの乾きが悪くて、印刷屋も頭をかかえていましたとか。

●誰れもがいま淋しい、片岡義男、角川文庫。めずらしや片岡氏から電話が

かかって、なにごとならんと思ったら、

こんどのカバーはああしてこうしてと頭の中では出来てるんだ。やってよ、

そこまで出来てるんなら。だから平野さんにたのむんだよ。そうかなあ。私の助手の森野嬢は大の片岡ファンで、こないだデザインを変えたばかりなんですよと言っていた。こんどは写真もなしで色べたで文字だけ。淋しくないか、売れなくなるじゃない。

●カバラと反歴史、評伝ゲルシヨム・ショレム、デイヴィッド・ピアール、木村光二訳、晶文社。

●大いなる酒場、ウェスタンの文化史、リチャード・アードーズ、平野秀秋訳、晶文社。

●世界変人型録、ジェイ・ロバート・ナッシュ、小鷹信光編訳、草思社。

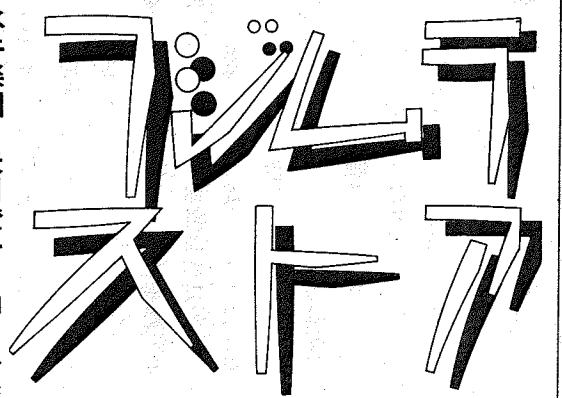
あと何冊やったらお正月。今年もずいぶん本を作った。反省もしないで。

(平野甲賀)

編集後記

早いもの。一年、というより九カ月たった。日記スタイルもこれでいったんお別れ。来年からは毎号一冊ずつを私有化することにした。カッコよくいえば責任編集。一月は高橋悠治、二月は田川律、三月は津野海太郎、四月は柳生弦一郎、五月は八巻美恵、六月は平野甲賀。以上が八五年度前半の私有者ラインナップ。さる日、新宿タイニー・アリスへ、世仁下乃一座の新作「ネームリング」を見に行った。今回は主人公が船。例の如く、本工と下請工が登場。班長の悪役がオモロカッタ。前作がタンクローリーで、そのうちかれらはあらゆる作業をマスターするのではないか。なお今回からはワープロでやる。経済的には圧倒的に安い、その分メンバーの労働がふえる。(田)

本当にふえました。おまけにプリンターは故障するは、ドタンバで「編集後記」を20字25行にしてほしいという要望がくるはで往生しておる。とうとう日記は書けなかった。書きたいことが山ほどあったのに残念だ。来年は印刷労働者。覚悟をきめますよ。(海)



水牛楽団+矢川澄子+如月小春
定価二三〇〇円(送料サービス)
夜這いの曲 しずくの曲 祖母
のうた 最後のノート だるま
さん千字文 ワルシャワ労働歌
花巻農学校精神歌 ボクハン
ンケイスル 都市 ★編集部あ
て郵便振替で申し込んで下さい

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二

購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所 氏名、電話番号、何号からと明記。

*本誌は次の書店にあります。

模索舎(新宿) ☎三五二一三五七
ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三三二四九六一
ワンラブブックス(北沢) ☎四一一一八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)

名古屋ウニタ書店 ☎七三一一一三八〇

水牛通信 第六巻第十二号

一九八四年十二月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三(四二五) 九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 株式会社ライブラントショップ